

シンポジウム

いんぺい  
隠蔽された困難の「発見」とケア

ユニークフェイスとメイクアップ

松 本 学

(NPO法人ユニークフェイス副会長)

小 林 照 子

(メイクアップアーティスト・(株)美・ファイン研究所取締役社長)

コメンテーター サトウ タツヤ

(人間科学研究所専任研究員・立命館大学助教授)

司 会 中 村 正

(立命館大学教授)

中村 「当事者のまなざし 紡ぎなおしの物語を聴く 」の第3回目です。ヒューマンサービスと対人援助に関する研究テーマの中で「セルフヘルプ」「セルフケア」「当事者主義」という多様な角度から光を当ててみたいと思っています。今日は3回目として「ユニークフェイス」の会をつくられた松本学さんと、メイクアップアーティストとして活躍される小林照子さんにお話を伺い、外見に焦点を当ててみたいと思います。ユニークフェイスのパンフレットに「顔のNPO」とあります。外見を直接テーマにしたNPO、当事者グループでもあるし、セルフヘルプグループでもあると思いますが、ユニークフェイスをつくられた背景、どんなテーマがあるのかをお聞きしたいと思っています。外見を広げていきますと、いろんなテーマが入ってくると思います。アトピーも入るし、身体に関する障害もいて多様な人たちが入ってくると思います。ユニークフェイスを立ち上げ、そこから見てきたものを話していただきたいと思っています。

もう一人、メイクアップアーティストとしてご活躍の小林さんには、歪められた美意識がある時に、プチ整形とも対比しながら、メイクアップがどのように人を変えていくか。そのことのサポートをしているわけで、そのあたりも含めてお

話していただきます。この種のテーマで、お二人が一緒に会うことはないと思うので、異色のテーマ設定として話がお聞きできると思います。外見に悩みや問題を抱える人たちの援助、心理的な面もあると思いますが、メイクアップの技術も含めて、いろんな援助があると思います。そういうことを、お二人の話から、ぜひ浮かび上がらせたいと思っています。

## ユニークフェイスを立ち上げるまで

**松本** タイトルは「隠蔽された困難の『発見』とケア」ということですが、今日お話する内容は、私たちはどうしてユニークフェイスを立ち上げたかということです。ユニークフェイスとは何かについては個人史にからめてお話ししたいと思います。活動としてのユニークフェイス。どうしてユニークフェイスが今までなかったのか。これからどうありたいかというあたりをお話ししたいと思います。

私たちは、今まで顔の変形による心理的な辛さを無視されてきました。その時に頼りになるのは、医者でも学者でもなく、当事者自身でした。私たちは当事者自身が自分たちの体験を語り合う場を、少なくとも大阪と東京で設けることができました。今度はそこから先、ユニークフェイスは、これから何をしていけばいいかが問われているわけです。最初に個人史について。当日お見せした写真は生後9か月くらいのものだと思います。隣は母親と祖父です。抱かれているのは私です。小さくて可愛い。顔が腫れている状況が見えるかと思います。生まれた時から、この顔でした。生後すぐ腫れていましたので、両親は病院回りをします。「腫れているけれども病気ではない」と言われて、あちこち回っていたようです。両親は顔が腫れている状況が気になっていました。幼稚園までずっと病院通いをしていました。

初めての手術は5歳の時でした。成形外科で初めて「リンパ管腫」という病名が確定して、病気とされることによって手術がなされました。それまでは「病気ではない」と医者から相手にされなかったわけです。幼稚園年長組で2週間くらい入院して手術します。その後、顔の腫れは目立たなくなったのか、といえばそうではありませんでした。小学校6年生の時の写真。手術をする前と違ったこと

は、耳から顎にかけて細長いミミズ腫れのような傷ができました。傷によって成形外科で「整形手術の失敗だろう」と言われたりして、手術をしたことと、顔が腫れていることを言われるのがしんどいことでした。自分では顔の腫れが全然気にならないような、いかにも気にしてないような素振りをしながらも、行動ではそれを隠すようなことをする。写真の写り方など、自分の顔の腫れが目立たないような立ち方をする。「会報」に私の顔写真が載っています。今は普通に正面から写ったり、顔の腫れが目立つように写っていると思いますが、小学校高学年から高校にかけては、顔の腫れが目立たないように、わざと左側の方向を向いて、腫れていない方向を見せて写っていました。高校の卒業アルバムでは皆は真正面を向いているのが、一人だけよそを向いていて、かえって目立つようなことをやっていました。

二度目の手術。高校2年生、16歳の時でした。関東の生まれで、北の方では進学校は男女別学なんですね。男子校にいまして、学校の中に女性が一人もいない状況です。女性といえば購買部と保健室の先生だけで、後は先生も男性なんです。まったくの男性の中で生きている。通学途中にすれ違うくらいしか女性と話す機会がない。あとは母親とか妹とか。女性に触れないことによってかえって女性に対する意識が強くなっていったと思います。そうした環境の中で、なぜか「このままじゃ結婚できない」と思ったんですね。それと猛烈に「カッコいい自分になりたい」と。将来、大学生活をする、来るべき大学生活を考えると「手術をした方がいいんじゃないか」「女性にもてるようになった方がいいんじゃないか」という思いがあって、だけど誰にも言いだせない。小学校の時、整形手術失敗と揶揄されてから、自分の顔についてメスを入れることが、社会的に望ましいことではないのではないかという意識があったのかもしれない。当然家族にも親にも話せない。男子校の男社会の中で「自分はこのままではひょっとしてだめになっていくのではないか」という意識が膨らんでくる。おかしな話ですが、そのジレンマの中で「やっぱり手術をしよう」と。母親と喧嘩するような形で手術を言い出すわけです。手術以外にも対策はあったかもしれない。医学的な手術だけではなく、度胸をつける練習みたいなものもあったかなと思ったりするんですが、その時は「医学の進歩はあるかもしれない。最初の手術から10年くらいたっているから、リ

ンパ管腫というマイナーな病気に対する治療法が進んでいるかもしれない」という気持ちもあったわけです。

実際に手術をしてみると、顔の腫れは鏡を見てみてもほとんど変わりがなかった。「認めたくない自分」「諦めている自分」。手術室から出てきた私を、母親が写真に撮ろうとしたわけです。もうそれは辛くて、今までのスタンスではなく、顔のことは気にしたくない。諦めている自分も否定したかった。治らないという自分も否定したい。治らないという事実も否定する。本当は治したいんだけど、手術で顔の腫れが引かないことを認めたくないという自分も、どうしようもないんだなということで、複雑に、ないまぜになりながらいました。その後「諦めている自分」「手術はできないからこの顔で生きるしかない」という気持ちが徐々に出てきたかなと思います。そうやって治療を諦めます。「この顔で何とかやっていくしかない」。鏡を見ても左の顔や目の腫れは引かないわけで、他の部分で何らかの魅力を高めていくしかないだろう。そこで徐々に「他の人はどういうふうに生きているのか」ということに気持ちが行ったわけです。

それから5、6年、ウロウロして、そうこうしている間に、ユニークフェイスへとつながっていきます。

## ユニークフェイスはどうやって立ち上がったか

ここから先は、ユニークフェイスがどうやって立ち上がっていったか、「任意団体としてのユニークフェイス」「NPOとしてのユニークフェイス」「ユニークフェイスであることの意味」についてお話しします。

大学に入って治療を諦めて「この顔で生きるしかない」と思いながら、自分探しの旅に出てしまいました。大学に4年間行ったけど何もならない。私の場合、今いる京都大学で大学は3つ目です。たまたま1997年、MBSの深夜放送のドキュメンタリーで「<sup>いびょう</sup>異形の君へ」が契機になったわけです。1時間のドキュメンタリー番組で、石井さんという顔にアザがある人が、そのテーマで直接正面を切って採り上げて顔の話をしていました。今までテレビとか雑誌で、顔の変形について正面から取り組んだ話は聞いたことがありませんでした。渡りに船だと思って、

すぐテレビ局に連絡をとって、顔の勉強会を始めました。顔についての本を読んだりして、その中で「同じような当事者が会える機会は貴重だな」ということは共通認識としてあったわけです。それで1998年から「ユニークフェイス」を立ち上げることになっていきました。このへんから振り返ってもいろいろなことがあります。98年から「顔の勉強会」をやりだして、99年3月「任意団体としてのユニークフェイス」を立ち上げました。東京と名古屋と大阪で、大阪は私が担当して。NPOになったのは2002年1月です。

## ユニークフェイスの意味と活動

それから重要な点は、ユニークフェイスの意味です。99年、火傷、アザなど外傷の名前はすでに存在していたと思いますが、あらゆる原因について、見た目の違いを表現する言葉というのは日本ではなかったように思います。「疾患が原因で固有の顔だちになる」ということを表現したかったわけです。しかし、これでは日本語としてあまりに通りが悪い。では、英語に直してみようと。英語ではdisfigurement、visible differenceという言葉になるのですが、日本では「ユニークフェイス」としました。そしてついに2002年1月に石井さんとNPO法人の記者会見をしました。

僕らが今、できていることは、事務局管理の部分です。それと、各地で行っている定例会です。実行委員会の中にチームとかがあるのですが、実現の可能性の高いものは「よさこいプロジェクト」です。札幌のよさこいソーラン祭りに行くという話がありまして。メイクチームも実現の可能性は高いです。

基本方針としては「私たち当事者自身がお互いに支援する」「あらゆる専門職によって支援される」「社会に対して偏見、顔の変形を有することの困難を告知、啓発していく」という活動です。活動について、定例会が、今の私たちの中心の活動です。定例会の意味を大事にしていく理由は「当事者が初めて同様の体験をしていく人と出会う場である」こと。僕は3年やっていて、どういう反応が来るか見えてきますが、初めて同じような立場の人たちと出会う当事者は感激されます。その場を用意することは大事なことだと思います。まだ一人で悩んでいる人は多

いと思います。「自分の経験について話すことのできる場を保障する」「批判されないで話をする」ことは大事だと思います。「安心して話す場所の確保」のために努力しています。ピアカウンセリングを動かすための幹事の人たちの養成もしています。ピアカウンセリングにとって大事なことは「自分自身の体験をしゃべるところだ」と。互いの語りを尊重して、全員が少しでも話せるようにして帰っていく。「互いの語りを尊重する」ことは「他人との比較をしない」と絡んでくると思います。こういう形で定例会を持っています。

普段の定例会は、お客さんはいないのですが、車座になって話をします。お父さんの言葉、お母さんの言葉、ご本人の立場で話すのです。オープン説明会は、当事者というより、一般の人たちに対してユニークフェイスを知ってもらうという活動です。去年はたまたま助成金がたくさんとれたので、北は札幌から南は福岡まで各地を巡りました。

もう一つ重要なユニークフェイスの活動として「会報」があります。定例会に出てこない会員の人にとっては重要な位置を占めています。東京と大阪と名古屋の3か所ですから、それ以外の方に会報を送っています。会員数は今、劇的に増えています。不思議なんです。去年、NPOを、2002年1月に申請してから去年12月までほぼ倍くらいに増えています。会員数の激増の原因を考えると「見た目の違う問題というものが、そもそも忘れられているんだろうな」と思います。ユニークフェイスが、見た目の問題についての焦点を当てたことになるのだろうなど。私のようなリンパ管腫のような病気自体、マイナーな病気なんです。今までは「患者会」として疾患に限定したものが多かったのですが、ユニークフェイスでは、対象が比較的広い。どんな顔でもOKだとしたものですから「あそこへ行けば大丈夫」という駆け込み寺的なものが出てきたのかもしれない。機能的な困難以外の困難を重視したこともある。美醜の問題が絡んでいるかもしれませんが、「美醜の問題は本質的でない」とされて、正面から取り上げられなかったことが、私たちのようなグループが出てこなかったことの原因の一つだろうと思います。

## しんどさが認められない；既存の障害との比較

特にユニークフェイスについて言われることですが、既存の障害と言われるものに比べると「君たちは五体満足なんだ。他にしんどい思いをしている人もいるから、君たち全然平気だよ」。これはユニークフェイス以外の一般の人たちだけでなく、悲しいことに、ユニークフェイスの会員でもこういうことを言う人がいます。私たち自身も、しんどさを認めながら認められない。体では認めているんだけど、口では認められないというジレンマがあるわけです。「顔にかかわることで、恰好なんか気にするな」と言われたりよくします。「身体的な魅力は本質的なことではない。本質的でないことを克服してこそ、すばらしいのだ」ということで、一連の3つのものが絡まってユニークフェイスは「しんどさがなかなか認められない」という状況があると思います。

では当事者はどういうふうに言われたか。男性は「顔のことは気にしない」。女性だったら「治してあげたいね」と親が言ったりする。一方で社会から「正面から美醜は問題にするな」と言われ、家族からは言われる。なかなかこの狭間の中に立って厳しい状況があるということです。

「存在を少なく見積もる」ということが、よく言われます。お話をする時、「今までユニークフェイスの方たちを見たことがありますか？」と聞くと「ほとんど見たことがない」。でもアザ、血管腫のある人は500、600人にひとりはいるはずで、大きな小学校に通っていた人なら確実にすれ違っている可能性があると思います。特に、会を立ち上げてから、どこに、どういう人がいるか、比較的よくすれ違ったりします。ただ「存在を少なく見積もる」ということはあります。

## これからのユニークフェイス

じゃ、これからどうしたらいいか。ユニークフェイスはとりあえず立ち上がりました。定例会も準備することができました。だけどまだちゃんと認めてくれない人たちは一杯いる。じゃ、どうしたらいいか。とりあえず、僕が思うことは「美醜から逃げず、直面すること」。世の中には美しさとか醜さは価値観として軸

として存在するだろう。それがよいか悪いかはおいておいて、相当大きな力を持っている。それは素直に「存在する」と認めていいのではないか。そこから先どうするか。

僕は、ゴッホとレンブラントの67歳の自画像が好きです。なぜかという、自分たちの美醜を見つめる上で鍵になるのは「自分自身の顔を見つめること」だと思えます。私自身も25、26歳から鏡をずっと見るようにしてきました。鏡を見続けることで、自分の顔は実際に変わってきたような気がします。ゴッホの自画像を思い浮かべていただくと、わずか10年、20年に自画像をたくさん描いています。その中でどんどん顔が変わっていく様を見るわけです。レンブラントも変わっている。美しいとは言いがたいかもしれないけど、そこに何らかの力があるように僕は思います。ゴッホの自画像も何らかの力がある。それを鏡に直面することによって浮かび上がらせる一つの試みなのかなと、個人のレベルですが、「隠蔽」させることを防ぐために、自分たちを「鏡に直面させていく」ことは必要なのではないかと思えます。

最後に、もう少し大きな意味で「ユニークフェイスのゴールとは何か」。顔の変形を有する人たち、ユニークフェイスの人たちが必要な「インフラの整備」「心理学的な支援」「雇用促進」。雇用促進については、履歴書で写真ではねられている人がいたりします。そのことについて人事の人たちに話をしていくことは必要だと思えます。社会においてユニークフェイスの存在を伝えていく。これは大事だろうなと思えます。

私たちは今まで「顔の変形による心理的な辛さが無視されてきた」「頼りになるのは当事者自身である」「当事者が自分の体験を語り合うことによって少しは自信を持つようになる」。その中で何をしたいか。一つは個人的なレベルで「自我」の問題、自分たちの顔を磨いていくこと。美醜を直接、認めて磨いていくこと。それから大きなレベルでは顔の変形の人々に対してのインフラをつくることだろうと思えます。

ということで、ご静聴ありがとうございました。

**中村** 最近『じろじろ見ないで』という写真集が出たんです。「普通の顔を失った



9人の物語」というサブタイトルがついていて、松本さんも登場します。この本をジロジロと見ているとジロジロみないで普通に見ることができるようになります。

さて、次にお話しいただくメイクアップアーティストの小林さんは松本さんに紹介していただきました。「メイクアップアーティスト」と「ユニークフェイス」がどのように出会うか。どんな接点があったかということも聞いてみたいところです。ユニークフェイスについての一つの援助のあり方でもあると思います。

### 「美・ファイン研究所」までの道

**小林** 小林照子と申します。48年くらいメイクアップという仕事をしています。少女時代に描いた夢は「演劇の世界のメイクアップアーティストになろう」ということでした。私自身が、少女時代に演劇を志していたからです。演劇の中で何かのスタッフになりたい。裏方になりたい。欠落しているのがメイクアップでした。私が言っているメイクアップは外見を扮装でつくる。キャラクター創りですね。演劇の世界ではいろいろなキャラクターが必要ですから、そういうものをつくるプロになりたいと思ったのが18歳くらいの時でした。そこから美容学校、デザイン学校に働きながら勉強し、20歳からこの仕事をしています。「メイクアップアーティストになりたい」と思って入ってみたものの、メイクアップアーティストという仕事もないし、それを追求している人もいない、教える人もいないという現実、これは自分が研究開発していくんだと思ひまして、化粧品会社コーセイ化粧品に入りまして36年間在籍しました。その中で、演劇の世界に早くいこうと思いながら、一般の人たちが、化粧品を開発したり、指導したりということだけではなく「人が一人ひとりの魅力的な自分を切望しているのだ」ということがわかり、そのプロになろうと。演劇の世界も含めて「すべての人に美を提供できるプロになろう」と考えていきました。コーセイに在籍中は自分自身を磨くことにも、いい環境であったと思います。コーセイは5,000人くらいの社員がいる会社で、入社27年目で女性で初めて取締役に使っていただきました。60歳までには社会に貢献できない。「会社」を「社会」と引っ繰り返してみ、辞任して社会に

飛び出し「美・ファイン」、美は外見、ファインは心の状態を表していますが、「外見が変わる、心が輝く」というのが私がめざす美であると考えておりましたので「美・ファイン研究所」をつくりました。そこでいろいろな研究をしていることが、今回に結びついているわけです。

## フロムハンド小林照子メイクアップアカデミー

人を育てるパイオニアとして、次の人を育てていかないと何も大きな仕事ができないと考えましたので、20数年前から「教育」というものに力を入れています。そこで「フロムハンド」、手から、この技術を人のために、「フロムハンド小林照子メイクアップアカデミー」という学校をつくりまして、今、学生を育てているという環境にあります。その二つの会社を運営しながら、社会貢献するためのボランティア活動として3つの研究会、ネットワークをつくっています。その中の一つ、最初につくったのが5年前、JMAN「<sup>ジェイマン</sup>ジャパンメイクアップアーティストネットワーク」。そこが今年5年目で、顔に関するシンポジウムを開こうと考えております。5月9日を「メイクの日」と商標登録しましてJMANでは5月9日を中心にいろんな活動をしています。一つの会場に100人のメイクアップアーティストが参集して1,000人以上のお客様にメイクアップの指導や技術を提供する。高齢者センターに行ったり、地方でも「メイクの日」を中心にしたメイククリニックをする。母の日につながりますので、日曜日の母の日は「お母さんを連れていらっしやい。親子3代いらっしやい」ということをやっています。これがJMANのボランティアです。

## エンジェルメイク研究会

もう一つのボランティア活動が「エンジェルメイク研究会」です。看護師さんが、亡くなった方へのお化粧品に苦労している。昔は家で亡くなり、家族が「こんなふうにきれいだったね」と、いきいきと、きれいだった時の化粧なり、外見をつくって送り出す。今は、普段お洒落をしている人たちが、病気になって、病院

に担ぎ込まれて、病院で亡くなるケースが多い。「このままの苦しそうな姿では遺族の方にお目にかけるのも気の毒だ」と、ほとんどの病院が看護師さんが、自主的に、又は院長のお考えで「亡くなられた時もきれいにしてお帰しなさい」と行われています。看護師さん出身の作家で『おたんこナース』の原作者でもある小林光恵さんが、看護職在職時代の喜怒哀楽を『ナースステーション』『ナースマン』などの作品としてつくっていますが、彼女と10年以上前から交流がありまして、看護師さんが患者さんたちへのおしゃれをさせると元気を回復するとか「お亡くなりになった時、どうしたらいいかわからない」と相談を受けていました。小林さんのために力になりたいと思って、私たちが看護師さんたちと研究会をして「どんな場合にはどんな色を使う」「どんなふう<sup>ふく</sup>に膨らみます」とか、私たちが研究して、その成果を全国の看護師さんたちにご指導したり「それにふさわしい化粧品が開発されるようになればいいですね」と「エンジェルメイク研究会」を静岡県榛原総合病院をモニター病院に、昨年からは看護師さんたち40人くらいモニターで、毎回、私たちがつくった化粧品のセットを使って「こういう患者さんにはこれがよかった」という情報交換を行っています。今は90%が病院で亡くなり、看護師さんがお化粧を行う。「ご臨終です」、そこまでが医療で、それ以上はサービスであるから「サービスをするか、しないか」という議論がある。看護師さんがやるべきかどうかわからないけど「思いやり」としてやっている。それをサポートする研究会を立ち上げています。これが二つ目の研究会です。

## 医・美・心研究会とユニークフェイス

そして松本さんたちのかかわりのある研究会が3つ目です。「医・美・心研究会」は3年たちまして4年目を迎えます。最初はセラピーメイク研究会という名称で活動していましたが、セラピーメイクはメイクが主体になってしまうので「医・美・心研究会」と一昨年からは名前を変えて活動しています。この中で、昨年からは立ち上げたのが、「医・美・心のテクニックをもっと学びたい。2か月に1度の勉強会では足りない」と1年間のベーシックコースを始めて隔週日曜日、朝から夕方までびっしり使って、午前中は医学、心理学の理論的な勉強。午後はテク

ニックの勉強。午後が私の方の担当で、さまざまなテーマに沿ったメイクアップで表現するというテクニカルな研究をしております。1年間のカリキュラムの後半は、火傷<sup>やけど</sup>、アザ、さまざまな外傷、先天的な障害のある人たちにどうすればカバーできるか、どうすれば本人の望む魅力をつくれるかという方法のテクニカルな理論をしております。「医・美・心研究会」を立ち上げる前後に「ユニークフェイス」とのかかわりができ、後半ではユニークフェイスの当事者たちのお話を伺ったりしながら、私どもの提供できる技術を開発していく研究をしようとして。松本さんと、そういうふうに関わり合いました。

## みんな、顔へのコンプレックスを持っている

ほとんどの人が「自分の顔に対して謙虚すぎる気持ち、コンプレックス」をお持ちである。私が長年、たくさんの人にかかわって「人はどうして、どんなきれいに思われる人でも自信を持っていないんだろう」ということが、私がこういうふうにいるきっかけになっています。次に「私がやっているメイクアップはどんなふう構成されているか」「提供しようと思う美を、どんなふうには考えているか」を一覧表でお見せしたいと思います。それから「人はいくらでも変化できるという事例」。私がメイクアップで変えた人たちはさまざまな人がいますが、許可をいただいて「大丈夫」という方のお写真を持ってまいりましたので、それをお見せしたいと思います。最後に「私が今、取り組んでいるテーマ」について。今日、初めて出会わせていただいた中村先生、サトウ先生、以前から存じあげている松本さんたちと知り合ったために、私自身、これからこういう人たちのお考えやお力をお借りしながら進めていけると思っている内容について、お話ししたいと思います。

誰でも「どうしてか、わからないが、コンプレックスを持っている」。これはモデルの秀香さんの話。モデルや女優さんにかかわることが多いのですが、私から見れば「こんなにきれいに生まれて、すごく得しているな」という人たち、スーパーモデルの人たち。その人たちが、そういう世界に入ると、なぜかコンプレックスを持っていて「あっちの芝生が美しい、私の芝生は美しくない」と思ってい

るケースがとても多い。「あなた、バチがあたるわよ」と言いたいくらいの考え方を  
持っている。特に秀香さんは、とても魅力的な女性です。モデルとしての外見  
だけでなく、生き方にも魅力のある女性です。子どもを持ちながら、30歳くらい  
までファッションモデルとして美しいプロポーションを保ち、ファッションショ  
ーの舞台に出ていました。秀香さんのコンプレックスは、モデルは17歳、18歳ま  
で。20歳となると「姥桜」と噂されている。「秀香さんってえらいわね。頑張っ  
ているわね。年をとってもえらいわね」と言われても「モデルとして美しい」と言  
われたためしがない。そういうことでコンプレックスを持っていた。イライラし  
てみたり、後輩を叱りつけてみたり、自分自身、毎日何か楽しくない。うとまし  
く思われていた。「引退します」と引退して、子育てをしている地域社会で何か活  
動しよう。皆のために役立とうと思った時、「秀香さん、きれいね。なんでそんな  
にきれいになれるの？」と皆が「きれい」と絶賛する。モデルさんは成り立ての  
頃は「きれい」と絶賛されますから、それが普通だと思って、普通でなくなるこ  
とに対してイライラしてくる。「ああ、私って、なんて幸せなの」。またファッ  
ションモデルになっていた頃の「きれいね」と言われて「そう？」という自分に返  
って、いきいきしながら、更に表現者として生活を送っています。きれいな人た  
ちは「きれいな世界に入ると、そこでの優劣が出てくるのだろう」と発見したと  
いうことです。

## 外見の力も大事・「高齢社会をよくする女性の会」

中村先生やサトウ先生の心理学の研究では、こういうことはあたりまえかもし  
れませんが、日本人の美に対する、顔、外形に対するしつけ、受けた教育が、私  
たちの年齢の者が受けたものと、現在の若者たちが受けたものが全く違う。別の  
国で暮らしているような環境にあることから起こってくるのだと思います。樋  
口恵子さんが主宰している「高齢社会をよくする女性の会」があります。私もそ  
こに所属していますが、樋口恵子さんは、テレビに出るなど外見をさらされる環  
境にあり、「私ってお化粧下手なのよね。どうしたらいいかしら？」と心の中で思  
っていました。高齢社会をよくするために長年、活躍してきて「高齢社会をよく

する女性の会」はその結果、社会に認められてきた。「頑張ったからいいわよね、ご褒美に小林照子さんの講演を聞きましょう」となったわけです。皆さんが頑張らなかったら、呼ばれない私だったんですが、「顔のことを勉強したっていいわよね」。それを発表したら大変反響があったらしい。しかも「私、モデルになるわよ」と「モデル樋口恵子」と書かれて新聞にも出てしまいました。それが100人しか入れない会場に殺到したわけです。東京の青山ウイメンズプラザのホールに行くと、高齢者がたくさん並んでいました。皆、高齢社会をよくするために、会のメンバーは外見は構わずに頑張ってきた。樋口恵子さんのご挨拶の中にも、司会者の話の中にも、共通して「私どもは顔を磨いているくらいだったら内容を磨けという教育を受けてきた。外見を磨く人間はロクな人間ではない。そういう軽薄なことをしないで中身をしっかり磨きなさいと教育を受けて、いずれ人格が表に滲み出てくるのだという教育を受けて、ここまでまいりました」。だから「頑張ったからいいわよね」と呼ばれた私は開口一番「頑張った皆さんに、私が今日、外見の力も大事よ、というお話をさせていただきます」と言いました。

## メイクアップアーティストの卵たち

私は日常、学校でプロになる人たちを育てていますが、メイクアップアーティストになりたいと思った動機は、「自分がきれいになりたい」「どうしたらきれいになるの?」「きれいになって面白かったからプロになろう」と。プロになるのに適性があるかどうかわからないけど「きれいなことが好きだったから」「きれいにする仕事をしたいから」ということで入ってくる生徒たちが大半です。150人、毎日教育しています。その人たちにいつも言うことは「外見で、まず自信をつけなさい」「その自信を人のために役立てる自分をつくりなさい」「多くの人たちに役立つプロの技術や理論を身につけなさい」「早く社会貢献できる自分をつくりなさい」「自分から決めないと自信はつかない」「自信がつけば、もっと人のためにという勉強ができる」「プロとしての自信がついたら、もっと大きく社会貢献できる自分になる」。外見から教育して内面を育てていくことを、若者にはしています。高齢の方で頑張った人には「美が<sup>にじ</sup>しみ出た人はいいいですが、しみ出なかった人の

ために、私が滲み出してあげましょう。日本という国が「しっかりと内面を育てれば滲み出る」という教育で「外見を磨くことが恥ずかしいことだ」としてきたから「外見を磨いていないように」ウソをつくようになってたわけです。

私は少女時代、演劇のためにこの世界に入ろうと思っていたので、いろんな個性、キャラクターをつくる。例えば10代から80代までの人生を、メイクで表現するには、皺だけではいけない。人格がそこに伴わないといけない。意地悪な顔をつくる、円満な顔をつくる、円満な顔だけど、ずるい人格をつくる、など演劇の世界にいかうとすれば、いろんな個性、キャラクターをつくる自分がいなくてはいけないわけですから、たくさんの顔をいじることをテーマにしながら、自分で自力で人の顔、個性の出し方を学んでいったわけです。その時、私は幸いなことに、人の顔にすぐ触れる。「フロムハンド」、手から人の顔を触れることができる職業です。医者も心理学者も羨ましがってくれる。「小林さん、いいよね。人を撫ぜちゃうことができるものね。そしたら潜在的にあって、なかなか聞き出せないホンネが聞き出せるでしょう?」。そうなんです。私は20代の頃から仕事にかかわっていったので、私より30も40も年上の人、地位の高い人、その人たちのメイクアップをしてきました。「きれいになったでしょ」と言って「ポン」と背中を押してあげるような行為をしている間中、人は本音で話してくれる仕事だということを改めて実感することが多かったんです。

## 外見は内面を写し出す鏡

外見は内面を写し出す鏡である。健康状態もそうですが、心理を写し出す鏡である。皮膚。そこにクリエーションしていくと、心の輝きにスッと直接反映していくものという不思議な感じで、20代から「これはすごい仕事だ。こういうことかできる人をどんどん育てないといけない」と思いました。「謙虚すぎること」「自信がなさすぎる」「自信がないふりをする」。このウソ。私はね、「どうして人は外見に対してウソばかりつくんだろう」と思ったんですね。いずれわかってきたんですが、「謙虚すぎる自分を演じる」「謙虚であることが美德である」ことから「自分の顔を謙虚に考える自分をアピールする」わけです。「私なんて不細工だ

から、きれいになったってしょうがないですよ。それに対して私が「そうですね」と言うと、どうなると思いますか？ その人は傷つくと思いませんか？「何をおっしゃいますか、とんでもない」。この言葉を期待してつくウソ。「そんなことありません。あなたは素敵です」と言ってもらう「呼び水」を私は注いでいるのではないかと「人は自分の顔に関してウソをつき、謙虚であることをアピールして慰めてもらう」ということを感じてきました。

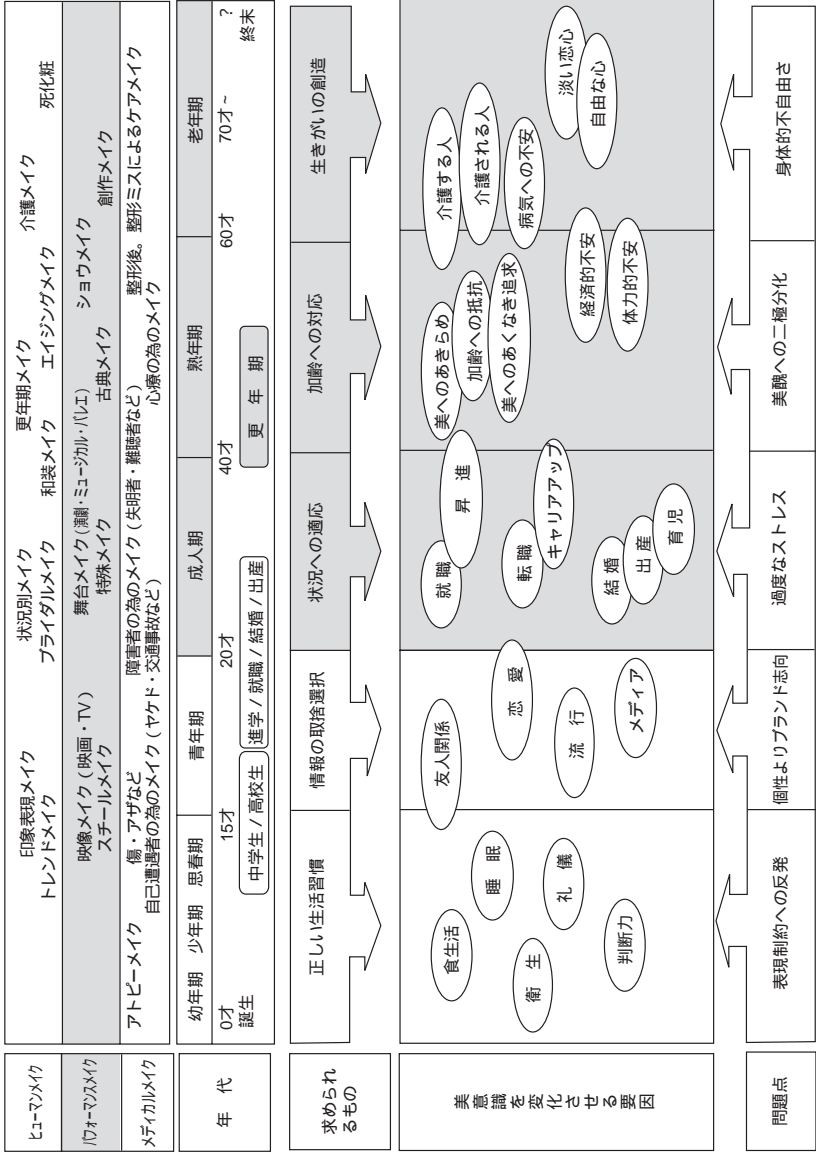
そこで私がプロじゃなく、その場でモノを売ろうと思えば、そんなこと何も研究する必要はないし、なぜそういうのかと考える必要もない。日本では化粧品業界でも衣料品業界でも高度成長した。外国人がびっくりするような高度成長です。化粧品関係はコンプレックスに刺激を与えながら「さあ大変だ、このクリームを使うとあなたの皺は、シミは、クマは、油ぎった皮膚は」というように直接、その人たちが持っている潜在的なニーズにピッピッとレーザー光線を当てながら「そうなんですか」と思わせてモノを売ってきたことが高度成長した原因なのかなと思います。「太っている」「痩せている」ことも同じです。太っている二人が「そんなことないわ、あなたとても素敵、スリムよ」「お痩せになったんじゃないの？」と言う。「もしもし、二人とも太っています」と言いたいような会話が、なぜ飛び交うのか。それに対して「不思議だな」と思うのと同じようなことを化粧や美しさの会話に対してもずいぶん感じてきました。

これは「メイクアップアーティストが果たす役割」の一覧表です。「ヒューマンメイク」は人の人生の中で死化粧するまでいろいろ状況がある。「パフォーマンスメイク」は演劇、映画、モデルとか美を必要とする職業の人たち。ステージのためのメイクアップ。最初にこの社会に入ったのがパフォーマンスメイクです。「医・美・心研究会」でやろうとしているメイクアップは「メディカルメイク」です。アトピー性皮膚炎とか先天的障害がある人たち、後天的に障害を持った人たちに、私たちがどのくらいサポートできるか。ケアできるか。整形とかプチ整形のミス、そういうことの相談にも「美・ファイン研究所」でも医療と美容を接近させたコンサルティングを行っています。「医者がどのように美容に接近していったらいいか」というコンサルテーションを行っています。



図 メイクアップが果たす役割

資料提供：美ファイン研究所



## いつどのように外見が重要になるか、どのようにアドバイスできるか

さまざまなニーズに対して、私たちは「思春期」のあたりから「老年期」、終末まで提供できる自分になろうと思っているわけです。私たちを求めのお客様が多いのは「思春期」と「更年期」です。思春期は自分自身を確立していく時期ですから「自分に対してコンプレックスを持ってしまったり」「自分に対して自信を持ちすぎたり」して外見の美に対して興味が出てくる。私たちが指導していきたいのは「正しい生活習慣」です。「衛生としての外見」「礼儀としての外見」。すべて外見だけでなく内面の「正しい食生活」「正しい睡眠」「正しい運動」ということで「外見の表現の仕方」。歯を磨くことの延長線にある「顔の洗い方」が習慣として実につけないといけない。今、日本で問題点は「表現」をすることにことごとく制約を行ってしまうことではないでしょうか。学校の学期中がまさにそうです。それが、夏休みになると突然変身してしまうんです。そして、また何事もなかったように新学期、9月から、髪の色も戻し、爪も切り戻っていく。スタンドプレーを育ててしまうのは残念だと思います。思春期の時、「自分は何者だ」と考える時、「自分に自信がもてる外見を持つためには内面を育てていったらどう？」という外見から入る指導の仕方が考えられます。ここで「個性」をきちんと身につければ、単にブランド志向にならずに「一番美しい自分の個性」を堂々と身につけて、魅力的に流行を取り入れたり、いい恋愛をしたり、いい友人をつくったりとやっつけていける。ところがそうでないと「シャネルがいいわ、グッチがいいわ」と「ブランドを身につければいい」ということになる。ブランドよりもっと自分が工夫して自分らしい表現があるはずだと教える必要があると思います。

次の年代になるといろんなことが起こってきて、ストレスを抱える。状況が変化して、結婚と仕事との両立に悩んだり、時間もなかなかないという世代です。ストレスからくる美容の問題がたくさんあります。「更年期」から「老年期」にどう変わっていくか。このあたりが私たちの活躍するところです。医学は10年前、ほとんど更年期を研究していなかった。更年期以降の女性の体について医者の研究テーマがなかった。高齢社会に突入して「加齢への対応」「生き甲斐の創造」など医者と同じように美容の人たちが活躍できる場面です。急に「美醜への二極分化」が出てきま

す。「どうせ、いいのよ、年だから」と美を諦めてしまう。「とんでもない、年をとるのは許せない」とプチ整形どころではない整形に走りすぎる。適度な整形は自信を持たせて、いきいきさせるという点で有効な場合があるので、研究して「これをやってみたら」と情報を与える必要もあるなと思って、美容整形、形成外科とか、皮膚科、循環器の医者たちとの情報交換をしています。もう一つ問題なのが「美へのあくなき追求型」、お金も暇も使って、どんどん派手になって「そこまでやらなくていいんじゃないですか」と指導しなければいけないこともあります。経済的にリッチな人、体力が盛り返す人とか更年期は一時、女性ホルモンが減退することによって起こってくる全身的な症状が出てくる。医者にとらい回しにされたりすることで「心の問題」を生み出してしまう。「美を求めて」きれいになって、1日を明るく過ごす対策を講じることによって、いきいきと、いい高齢化になっていくわけです。

老年期は「生き甲斐の創造」。介護する人も、介護される人も、この世代は不安や自由を持っています。外見の美をつくると痴呆症が軽度になっていたり、回復していくということも起こっています。

## 二人の方のビフォー&アフター；実写真つき

私自身はこのように考えながら、さまざまな人たちに社会貢献していこうと考えてきました。これから、メイクアップによって人生を変えた人たちのビフォー&アフターの写真をごらんいただきます。

「私がつくったメイクアップ」。この人（写真）は19歳の時、ミュージカルスターになりたいと思った人です。オーディションに行く。ミュージカルスターになったつもりで「こんな役になってみる」とオーディションに行った時、写真を置いてくる。「こんな役もこなせます」「あ、この人、こういう役で使おうか」と使う側のイメージが描ける。

この人（写真）は30代でモデルになるということで、若返る、30歳のこの人が顔は10代のように見える。モデルは若く見えないと、写真写りが悪い。クローズアップでナマをとるのは大変なんです。メイクアップの力で可愛い幼い顔をつくることは簡単にできる。30歳で、40、50歳を演じる必要もある。50代の雑誌ではモデルは30～40代です。妖艶でセクシーな表現。華やかな装い。フォーマルなものを演じる必要がある。



写真 ミュージカルスター



写真 モデル

## 生活とメイク・やる気をだすメイクなど

以下、写真はありますが、何人か、私がかかわった方について紹介します。

Aさんは30代かなと思ったら19歳の女性で、年齢に応じたものでいいんじゃないと。この人は鬱病になった。家庭不和です。この人が起きてくると、お父さんが「お前はやる気がない」。やる気がないように見えるのは顔だけなんです、やる気に見えるヘアスタイルをつくる。Bさんは、白髪でおしゃれをしたい。白髪の色のない世界を演じるならデザインは大胆にするというアドバイス。Cさんは「もっと人に愛されたい」と思っているインストラクター。「愛される顔」を描くというメイクアップ。眉毛が一文字になっている人は感情がわからない。抑えられているんじゃないかというイメージがありますが、とても魅力です。ミステリアスなアクティブな魅力を個性を表現する。Dさんはうっとり顔なのにカラーコンサルタントに「あなたはローズ色」と言われて、随所にローズを使って、うっとり顔なので、ゴージャスが描くタヒチの女のように野性的な感じを出す方が个性的であるという表現。Eさんはお母さんとして可愛い顔をしているのにイライラして子どもに嫌われるんです。「子どもに愛されるお母さん」を表現する。

Fさんは元国際線スチュワーデスで、旧家の妻になって「謙虚にしなくちゃ」と思ったらセンスがわからなくなった。もっと堂々と、今なら美しすぎて意地悪される年代ではなくなったからと、このようにしました。Gさんは髪の毛を長くするのが個性だと思っていて、顔に似合うスタイルをつくった方がいい、切らずに膨らませて写真を撮ったら夫が「なぜこんなふうにししないの？」と。夫が長い髪が好きだと思いこんでいて切らなかつた。誤解が多い世界です。

Hさんは「私は頑張っているのに仕事がうまくいかない」「頑張らない方が仕事をうまくいく」ことメイクアップでなし遂げた。Iさんはエステシャンになろうと勉強しているので「エステシャンに見られるような雰囲気をつくっておく方が、なった時に有利ですよ」という外見の表現をする。Jさんは更年期でうつうつしているので元気を出すメイクアップ。元気を出すパーマ。チリチリパーマをかける。日焼けしたような顔をする。

## 仕事とメイク：先取りメイクなど

Kさんは「仕事を成功させたい」「このようにしたら本当に成功する」というメイク。Lさんはメイクアップアーティストとして「医・美・心研究会」で松本さんとロンドンに行ってきました。渡辺典子さんです。メイクアップアーティストになろうというなら、こういう外見の表現にする。

Mさんは薬剤師ですが「男っぽく見られるのか嫌だ」と「女っぽく」している。「男っぽくした方が個性が出る」。韓国の大学の先生です。ファッションナブルな雰囲気をつくる。「大会社の社長秘書だから謙虚に見えないといけない」と思い込んでいるけど「ナチュラルにする方が謙虚に見える」。色を白くして口紅をつけて「古代の発掘された女のイメージのようにすることはしないのよ」と。Nさんはポーラの化粧品のセールスレディで成功したい。本当に成功しました。

Oさんは編集者ですが、部下に褒められない。「内面は磨けば顔に滲み出てくる」と信じてやっていた人が「もっと早く滲み出そう」と外見を磨いて、大成功して編集長の立場にあります。Pさんという保険のセールスの人、きれいになって「松坂慶子さんみたいに見えるわね」と言うので松坂慶子さんを研究して、この時よりもっと松坂慶子になっている。京都の女性で、きつく見られる。第一印象でもそう思っていたので、やわらかい感じにした。「コンプレックスは口だ」というんですが、化粧は口ですね。違うところに視線を移す化粧法もある。日曜日にボランティアで老人ホームにいらしている。「明るい顔でいきましょう」。辛い顔で頑張っていると老人も気がつかれます。

Qさんは検事さんで美容院に行く暇もない。「4年に1度くらい美容院に行けばいい」ヘアスタイルにしました。Rさんは大学の医学部の学生で「お前は生意気だ」とよく教授に言われる。「可愛い顔をして生意気な顔をするからだめ、生意気な雰囲気をつくれればそのままよ」。Sさんはクリエイター。彼女が賞をとった時は「こんなふうにしなさい」と。クリエイターでも自分の顔はわからない。

Tさんは笙<sup>しょう</sup>という楽器を吹く。「和」の時にはこういう顔をしなくちゃ。洋服の時はこうだと。Uさんはお茶の先生ですが、「和」の時のお化粧と「洋」の時のお化粧を使い分ける。東大の教授。「外見なんかどうでもいい」と言うので遊びでや

りましたら、彼はこれでぶちきれてしまっていて。「この洋服、この出で立ちで、大学に行けるわけないよ」と言っていたのが、1週間毎日着ていった。学生に褒められた。今はもっと弾けて金髪になっています。この社長は「社員が外見を構わなくて困る。何とかしてください」と、このようにヘアも眼鏡も洋服もその場で社員の前でつくり変えた。社長は「俺だってそうだ」と。7年前、「ビル・ゲイツのようになる。足りないのは外見と金だ。頭脳はある」「なろうよ」と。「成功しようとした時の顔」「成功した後の顔」。今、彼の会社はこの間に一部上場になりました。

Vさんは外見にコンプレックスを持っている。目深に帽子を被って「若い頃の服を着れば、若く見える」ということで「若い」ことにとらわれている女性でした。私の洋服を着て「いかがですか?」。自分を可愛がることをしてこなかった。瞬間に皮膚が喜んで、やさしくつくってもらって笑いが止まらない。Wさんからクレームがきて、「笑っている写真しかない。真面目なのがない」。うれしくて笑っちゃったんですね。高齢者で寂しそうな顔をしている。眉毛に問題がある。村山富市さんもそうでした。年をとると眉毛が長くなる。抜くのを忘れる。忘却の彼方に行ってしまう。眉毛に曲線を入れる。「この時59歳」「この時64歳」。全然違います。Xさんは、この時88歳、お誕生日に行くと、足腰が立たなかったのが、そのあと3か月で、皮膚が違ってきた。生きる喜び、「私は力がある」と思った人は、3か月の間にどういう気持ちで過ごすかによって新陳代謝が変わる。いきいきと瑞々しい皮膚になることがおわかりになったと思います。

## メイクアップで本音にふれる

皮膚に触れるというコミュニケーションによって、その人たちのホンネが聞けることを体験しています。後でその人が話したことを考えてみると、すべて内面的なことをお話している。「あなたってこういうふうに見える」というのは外見だけではない。真面目な人、仕事ができそうに見える。リーダーシップがありそうに見える。「子どもの頃からそういう場面がありましたか?」と言うと「あ、私は一番最初、自分が努力したからリーダーシップがあったと思ったけど、最初に顔

の印象があったんだ」と気がついて「そういえばそれに応えようとしていた自分がいて、一生懸命やっていったら、どこでもリーダーシップを発揮していた」。最初は内面だったのか、顔の印象だったのか、わからない。奥が深いと思います。「性格分析」「心理分析」と連動して「顕在的な性格」、今ある性格と、もっと本質的な性格を分析する方法と、そこから編み出される自分のポジショニング、「奉仕型」の人間が「教育者」なのか「表現者」なのか。いろんな自分がわかってくる。「顕在性格」と「外見」を一致させる方がいいのか。「潜在的な性格」と「外見」を一致させる方がいいのか。その「両面」を持たせる方がいいのか。それを私は今、客員研究員を入れて6人で「美・ファイン研究所」で研究しました。その成果を4月に発表できる段階になっています。そういう仕事をやっていて、将来「外見」や「内面」で悩んでいる人たちのために「分析方法」「表現方法」で協力できる自分になりたいと思っています。

**中村** どうもありがとうございます。「百聞は一見にしかず」という話だったと思います。話し方がまた「美を扱う方だな」と思ってお聞きしていました。この研究所の専任研究員であるサトウさんから、お二人の話をまとめて、大学にいて勉強しているものとして考えることを媒介者の役割を果たしていただきたいと思っています。

**サトウ** 人間科学研究所のサトウです。性格心理学も研究しているので、「顔は物理的なものか」「インターフェイスとしての顔」ということで考えていきたいと思っています。

性格心理学には古典的な問題として「ペルソナ、パーソナリティ」という問題があります。もともとペルソナには仮面という意味があります。「ペルソナ」という「仮面」をつけて「パーソナリティ」つまり、人格になる、というのが劇の世界です。仮面をつけることによって劇中人物になる。もちろん、そういうことは日常でもおきている。そう考えると今日の小林さんのお話とつながることがありました。顔は実はインターフェイスなんだ。「内面」から個人の側から見る問題と「外」から見る問題がどこでぶつかるか。「皮膚の中の顔」ということが重要だと



思います。「内面」といっても内面だけ見れる人はいない。「内面とせめぎあう場所」として「皮膚」「顔」があると考えたい。

それから、性格心理学には「ロビンソン・クルーソー問題」なるものがあります。「孤島に流れついた独りぼっちなロビンソン・クルーソーに性格はあるか？」ということです。性格があるかということに深さがあると、今日、思いました。「顔はあるか？」と聞くことだってできたはずなんです。しかし、「顔」ではなく「性格はあるか？」ということが問題になっている。ロビンソン・クルーソーが女性だったとして化粧をするか？のような問い方も可能なんだな、ということがひらめいた。つまり、「顔」がある種、社会的なものとして見られるべきだということに気づきました。「ロビンソン・クルーソーに顔はあるか？」と問うと、いろんなことが見えてくるのではないかと感じました。

ここまでは学範（ディシプリン）内部のオタクな関心ですので、小林さんとの話に絡めてもう少し話を続けさせてください。

小林さんのお話の中に死んだ人の顔の化粧（死化粧）のことがでてきました。死んだ人の顔は誰のものか。死んだ人に誰がお化粧をするのか。本人はそう思っているのか。ご遺族の方が。病院の方がサービスをするのか。死んだ人のお化粧の問題は大きい問題だなと、お話を聞いて感動しました。この問題は心理学では扱えない。心理学は生きている人のことしかやらないので。今日の一番のインパクトでした。スケールが大きい。そういうところにメイクアップが連なっているのはすごい、と素朴に感じました。

授業の時に学生さんたちに言っていることですが、自分は相手にとって「環境」なのだ。相手が無愛想な顔をしていると、こっちもムツとする。だけど、その前にこっちがどういう顔をしていたかを考える必要がある。だけど普通はなかなかそういうことを考えつかない。相手がむっとしてるから自分もむっとしているという方向しか考えつかない。つまり「自分は相手に反応している」という思いが強いんです。「相手が自分に反応している」ことが思い浮かぶと、色々対処することが可能になってきます。相手が自分を嫌っているように見えるときこそ、最初にこちらが笑いかけよう、そうすると相手の反応も変わってくるんじゃないか、なんてことがあります。そういう意味で「インターフェイスとしての顔」がある

と思います。

お二人の方の話を聞いて「しゃべる」ということはどういうことかを考えるのも重要だと思いました。フロイトが精神分析でやろうとしていたことは最初「煙突療法」なんて呼ばれていたりしました。つまり、しゃべることは煙突の通りをよくすることだ、というようなことがだんだん分かってきたのです。当事者の方の語りもメイクアップをする人の語りも、しゃべることはどういうことかという観点から考えてみる必要があると思いました。行為としての「化粧のプロセス」には、化粧をするという物理的なことだけではなく、される人の語りも混じっているんだろう、ということが分かりました。「顔の変化」と一言で言いますが、化粧品で外から変える部分と、しゃべりのプロセスで中から変えていく部分、その両方があるのでしょうか。もしかしたら、後者の化粧の最中のおしゃべるプロセスの部分の方が大きいのかもかもしれません。小林先生のお話が松本さんたちのところとつながっていくのは「プロセスの部分を豊かにする」ことで、成果としての顔をつくることより「つくる過程」がどう強調されていくというところではないでしょうか。そして、それはかなり心理学的なプロセスなのではないでしょうか。

それから「個性的である」ことが日本で難しいのは、顔の問題だけではない。日本自体が個性を認めない社会であるということがあるようです。昔は成績のいい子がいじめられることはなかったんですが、最近は成績がいい子、可愛い子とか、目立つことがいじめられる社会になっている。そのへんから考えてみると、顔の美醜だけでは見えないものがあるだろうと思っています。

最後に、今日、よかったなと思うのは、小林先生の笑顔が素敵で、お会いできたということだけで幸せな気持ちになれた、ということです。時間があれば小林先生ご自身の「笑顔の秘密」をちょっとお聞きしたいと思います。

**中村** メイクアップアーティストの活動や意義について体系的にまとめた話があったんですが、松本さんがメイクアップアーティストの話を聞かれて、ユニークフェイスとしての接点、希望など、どんな展開があるかをお聞きしたいんですが。

**松本** 会員の中でメイクに対する関心が高い。というのも、ユニークフェイスは270人中、8割が女性なんです。化粧によって自分を提示したい。単なる隠す化粧ではなく「隠す化粧から見せる化粧に」「装うような化粧」に質を変えていきたい。その中で「プロの方に技術を教えてほしい」というのは必然だと思います。ユニークフェイスの問題について、深く研究した方たちと一緒に考えていきたいと思っています。

**小林** 私が化粧品会社にいた時から「もっと社会に出て社会貢献をしたい」と思ったきっかけは何か。日本では化粧品会社が化粧品を売ることできれいになる。外見がきれいになるという図式が多い。しかし一人ひとりの個の魅力という出し方は、どこもやっていない。美容の産業は美容院、エステティック、理容院、化粧品会社、顔に関する周辺の業界がある。美容院は髪の毛を切ったりデザインする。エステティックは皮膚、ダイエット、脱毛する。化粧品会社は総合的な美をつくる。総合的な商品売っていく産業です。一人ひとりの美は化粧品を山ほど塗った顔ではない。髪の毛が短いからではない。魅力は声、表情、目つき、皮膚から出るオーラがある。血色がいい。そういうことでコミュニケーションをすることが大切ではないかと思ったわけです。

私がいつ頃から「笑顔」を自分で必要だと痛感したか。30代でテレビに出て機嫌の悪い顔をしてしゃべっていたんです。私のあだ名は「キツネ」「お目見えサギ」。吊り眼だったんです。今のように太ってなくてギスギスに痩せていましたからキツネの顔に近い。意地悪な、こずるい人格のように思われていた。「本当はあたたかくて情的で面白い人間だ。あなたって第二印象はユニークね」と言われるんですが、外見からはきついことばかり言って面白くないイメージから、そんなあだ名がつく。テレビを見てしゃべっている自分を見て愕然とした。あだ名をつけた人はセンスがあると思った。キツネのような顔で、きついことを言い、無表情。それをどう解体したらいいか。長野放送からの帰りに鏡を見て、笑ってみたら、子どもの頃に言われたことを思い出した。「照子さんは笑っている時がステキ」「照子さんが笑ってホッとした」。怖かったんですね。怖い人が笑うとホッとする。そういう自分がいたんだ。それなのに私は10年間も「あなたこうする方がいい

い」と化粧をしていたと反省しました。私は一人ひとりの美をつくって指導する立場であれば、その人の目の輝き「教えて」という好奇心のある顔が、魅力的だと思えば「そうか、一人ひとり、自分は魅力的だと思うように何をすればいいか」ということがわかりました。顔は化粧でごまかすだけではない、化粧で表現するだけではない。自分を動かす。表情を動かすことでコミュニケーションができる、こういうことを納得したことが、30歳から、私が、一つ身につけたことだと思います。

## （質疑応答）

**質問** 家族の話を聞きたいのですが、松本さんの話の中で、家族の「完治してほしい」という思いが変更していくということがありました。当人と家族の中で、ユニークフェイスに参加されるようになって親子関係について、どういう話が出ているか、お聞きしたいのですが。

**松本** ユニークフェイスの中で起こっている問題としては、お母さん、お父さんが中学生、小学生を連れてくるのがチラホラあります。こちらが抱く思いは、子どもさんがむりやり連れてこられているな、と。お母さん、お父さんが話を主導してしまいがちになりますから、できるだけ「同席はやめてください」とお願いしています。僕自身も母親、父親に対して顔の話はできなかった。恥ずかしかったり、言われるもの嫌だというところがありますので、当事者であるお子さんの気持ちを丁寧にしていかなければいけないと思います。

**質問** 心理学科2回生です。私の職業は医療従事者ですが、松本さんは「顔が腫れているが、病気ではない」と治療の対象にならなかった。病名が確定しなかった。私たちの立場でも、どうしようもない時があります。完治させることはできないし、うまく付き合っていくしか方法はない。しかし突き放すのではなく、医療者に治療以外にサポートする点とか、何かありましたらお願いします。

**松本** 具体的にどういう状況になるか、手術をして顔がどうなっていくか、ということをお小さい時も話を聞きかかった。医者は写真を見せて「医学的にはこうする」ということはあっても、日常生活の中でどういう影響があるかわからない。医療従事者は、他の当事者のグループとつなぐ役割があると思っていますので

「ユニークフェイスもあるよ」「メイクアップのグループもあるよ」という形で「足りない情報を補うような役割」を担っていただければいいかなと思います。それを私たちもアピールしていきたいと思っています。

**質問** 心理学科の3回生です。顔の変化を見せていただきました。その人の個性を引き出すのはどういうところにあるのでしょうか？

**小林** 時間があれば、その人とお話ししたことか「こういうふうにならなかつた」とか説明しながら写真を使うと「この人はこういう理想があって、こういう人生歩みたいと思っている」「こんなコンプレックスを持っている」ということがわかりやすいと思いますが。心理学を勉強している方にはプロセスがほしいですよ。よく聞いてくださったと思います。

ほとんどのお客様はコンプレックスを語ります。「私はだめだ」と思っている。「こうなりたい」という人生の目標は知っています。つまり、「マイナス面」と「なりたい人生、目標」という二つは正確に把握しています。自分の性格や内面を把握している。把握していないのは「自分の外見の魅力」です。外見の欠点はよく知っている。プロとして、その人のプラスの見方を見つけてあげる。言葉に代えたり、ビジュアルにしながら説明することをいたします。人の印象には表現の仕方、まとめ方がたくさんある。それをグループで何十通りにまとめて「あなたはこういう印象がある」と第一印象を教える、言葉で。「エッ」とびっくりしたり、「そういえば、そう言われたことがある」「本当ですか？」となる。外見は鏡を見てしか確認できない。自分の顔をナマで見ていない。人の顔は比べたりナマで見ている。自分の顔は直接見えない。だから見方が偏っている。とても魅力的なのに自分の魅力を数えていない。外見の印象分析は、印象の言葉をジャンルにして「子どもっぽい」「大人っぽい」「女性的」「男性的」「静的」「動的」と分けて、その人のポジションをつかみます。そして「二つのポジションを兼ね備えている印象がある」とかお話をします。「ああ、そうか、人から、こういうふうにならなかつた第一印象で見られている」という確認ができます。「あなたは何をやっている人」「何になりたい」「ミュージカルのスターをめざしています」「大学の先生になりたいからこんな勉強をする」「そっちに行くなら、ちょっとクールにした方がいいかもね」「大人っぽく見せた方が有利かもね」と目的を先取りして表現する。「エス

デシジョンに見える外見」「医療従事者につく外見をつくってしまった方がいい」というアドバイスを。「その人の魅力を生かす」点と「その人がなりたい職業のイメージを先取りする」。こういうことが設計になります。

「メイクアップをどうしましょうか？」とお話をして、その方の顔を確認してやっていきます。出来上がるまでに短くて2時間かかります。長くて4時間くらい。パーマをかけたり髪の毛のデザインをして、高度なものにするには4時間かかる。先ほどお見せしたビフォー＆アフターの写真は同じ日の写真です。

**中村** ありがとうございます。僕も学生から「怖い」と言われますので「どうしたらいいか」相談したかったのですが、「メディカルメイク」が単なる変化の創出ではなく、自分のコンプレックスと目標をつなぐ機能をもっている、ということであるならユニークフェイスとのつながり、対人援助の場面へのつながりも見えやすくなりますね。鬱病の方の例はとてもよくわかりました。当事者に聞くことと、今、どんな援助がありうるか。援助の多面性が、メイクアップアーティストからお話を聞く中で見えてきたと思います。今日はとても面白かったですね。どうもありがとうございました。